囲碁にまつわる言葉　【筋】

平成３年になると八碁連の前身であった碁老連にはいくつかの試練がやってくるようです。１つ目は、市民センターの対局では 20 名が限度で、会員数は 30 名位が限度であったという状況です。そのため会員募集をやめた同好会がでてきたことです。２つ目は２つの同好会でトラブルが生じ、規約が厳しすぎて感情的な行き違いが生じ、全員退会という事態になったようです。

同年４月に開かれた「ボケ防止のための啓発囲碁大会」は大和田寿同好会が主催します。「丁度地方議員選挙日と重なったためか 12 名の棄権者を数え、散々な状態だった」という会長の談話が掲載されています。「元八寿同好会主催の大会は５月５日に開かれ、会員の 10 名が棄権し、会員以外の参加も少なく、予想外の最悪状態となった」という述懐に似たコメントも投稿されています。主催者としては、予想以外の結果になるとなんとも言えぬ気分になります

----- 【筋】 ------

「筋」 とは国語辞典によりますと、「物事の道理、すじみち」とあります。「筋の通った話」という例文があります。 話の整合性がとれるとか、物語の辻褄が合うという具合に使われます。筋目とか理路といった用語は道理と同じ意です。

話題は変わりますが、大坂市内の南北に走る路線には「御堂筋線」「堺筋線」「今里筋線」などのように「筋」が頻出します。大阪の大動脈となっている「筋」の数々で、筋と名の付く道路が約 20 路線存在します。南北に走る街路は「筋」、東西は「通」というように区別しています。

御堂筋は、北御堂と南御堂という浄土真宗の寺院へと向かうために造られ、堺筋は、当時の貿易の拠点となっていた堺の港に向かうために整備されたようです。秀吉は、大阪城から東西に伸びる中央大通をはじめに整備したようです。計画された当初は「通」が 4.3 間と定められていたのに対し、「筋」はそれよりも狭い 3.3 間とされていたといいます。このように、あくまで「通」の方がメインであり、「筋」は「通」を補完する役割を担っていたようです。

さて碁では、味方の石同士が盤上の線を通じて、どのように連携を取っていくかを考えていきます。「石の働きが能率よくムダがないように打つには、筋に石がいかなくてはならない」といわれます。筋とは、急所のことです。形は守りの急所であるのに対して、筋は攻めの急所と言い換えることができます。相手の石の連携を、どのようにして断つかという戦術にもつながります。

味方の石同士が盤上の線で連携をとっている状況が筋です。こうしたときの着手点が「手筋」です。やや意外性を含んだ効果的な手を指すことが多いようです。「手筋」をおおまかに分類しますと、連絡の手筋と石を取る手筋があります。「筋が悪い」とは、味方の石同士の連結が不十分な手を打つこと、相手に石の連絡を絶たれそうな着手のことを指します。「手筋」は、通常の手ではありません。読みが入って手のことで、ピンチを脱したり、相手に大きな打撃を与える手、「辻褄が合う手」ともいえましょう。

手筋は英語では「 a clever move」といいます。意外性という着手ですから上手い表現です。とは言うものの、私には対局中では筋の良い手と悪い手の区別が未だにつきません。

(2023 年 7 月 6 日　大和田囲碁同好会　成田　滋)